

研究資料

一九世紀後半、二〇世紀初頭の
アメリカにおける日本美術の評価に関する一資料

榊田 絵美子

開国以来、海外へ渡った日本人画家は少なくない。美術を学ぶ目的であれば行く先の多くはヨーロッパであったが、その前後にアメリカを経由することも多かった。その目的は、美術を学んだり、状況を視察したりすることよりも、むしろ、経済的なものである。一九〇四（明治三七）年、岡倉天心とともに渡米した横山大観と菱田春草がニューヨーク等で個展を開き大成功を納めたことは既によく知られている。当時の日本では彼らの朦朧体の絵は評価されず、生活に窮しての渡米であった。大観は予想外の成功に驚いている。^{註1}以下に掲げる一九〇四年四月二九日の記事にあるように、彼らの絵はニューヨークでは、日本の正統な伝統を継ぐものと評価されたのである。

この例に見られるように、アメリカでは本国日本とは違う日本美術の理解や評価がなされていた。程度の差こそあれ、現在でも同じことが言える。アメリカでの日本美術の評価や理解の仕方、およびアメリカに渡った画家の現地での動きを知ることが、今回の作業の目的である。

以下に掲げるのは、ニューヨーク・タイムズの日本美術関係の記事とその要約である。同誌は一八五一年九月一八日に創刊されたが、記事の収集は一八六八（明治元）年からとし、テキサス州オースティンのテキサス大学中央図書館所蔵のニューヨーク・タイムズ・インデックス中「日本」および「美術」の項から網羅した。^{註2}時間的制約により一九一〇（明治四三）年までで終わっているが、この年で終えることに積極的な理由はない。本来、現在までを網羅すべきものであり、ポストンなど、ニューヨーク以外の重要な都市の有力誌についても調査が行なわれるべきであ

ろう。

記事の内容から確定できる固有名詞は片仮名の後に付した。日本ではほとんど知られておらず、大正二年画報社により発行され、当時の画家を知る上で貴重な資料である『日本美術年鑑』巻末の美術家名簿にも載っていない作家が多い。日本での境遇に不満を抱いてアメリカへ渡ったと考えられる。

収集した記事を通観すると次のようなことがうかがえる。

第一に、オークションについて報じたものが圧倒的に多い。そして、呼び物となっているのは陶器、漆器などの工芸品で、絵画、彫刻はあまり話題にならない。七〇年代前半までは西洋人による東洋美術コレクションが西洋人によって競売されているが、後半になると日本人が西洋人に所蔵品を託してオークションを開くようになり、さらに一八七七年一月四日の記事にあるように日本人自身が競売の主催者となっていく。九〇年代には日本人作家が自作を展示即売するようになる。

伝統的であることがアメリカで高い評価を得るための条件で、彼らの言う日本の伝統とは、「繊細」で「奇抜なデザインや配色」がみられ、「自然と親密に接している」などという言葉で表わされているが、叙述から実際に対象とされている作品を想像すると、工芸品では古くからある文様を古くから伝わる技法であらわすこと、絵画では陰影法や線遠近法を用いずに定型化した筆法で自然物を描くこと、が伝統的とされているようである。日本美術の西洋化については一貫して批判的で、西洋の需要にこたえるべく大量生産されるようになった工芸品の質の低下、線遠近法や陰影法を導入した絵画の日本的独自性の損失が指摘されている。

浮世絵がオークションの呼び物となるのは九〇年代からで、このころから一般の評価が高まっていることがうかがえる。八〇年代には既にホイットラー、ウィンスロー・ホーマーなどの画家が浮世絵から影響を受けた作品を描いているが、^{註3}一般的関心は薄かったらしい。国芳、国貞などの幕末浮世絵を高く評価したアンダーソンの著書について触れた記事が一八八〇年一月一日に出ているが、浮世絵についての言及はない。一九〇〇年以降は浮世絵だけの競売や展示が行なわれるようになっており、アメリカにおける浮世絵評価は九〇年代から急上昇したと考えられる。

作品をアメリカ市場に送り出すに際し、日本人の側も相手国の日本美術品につい

ての評価の一端がある程度知っていたようである。一九〇二年二月一日の記事で個展を開催中と伝えられている吉田博は、油絵を本制作と考えていた画家であるが、一八九九年に初めて渡米する際に水彩画を持参し、デトロイトで水彩画展を開いて成功をおさめた。この後、鹿子木孟郎、満谷国四郎などの洋画家が渡米した際も水彩画だけの展覧会を共に開いて成功し、多くを売却している。油絵を本制作と考えていたこれらの画家が、水彩画のみを展示していることは、彼らが売却を目的としてアメリカ人の趣好に合わせた作品を出品していることを意味する。

このように、この時期においては、アメリカでの評価に対応すべく日本の古今の美術品が紹介され、アメリカ人はヨーロッパでの日本美術評価に一方で留意しながら、流入して来る限られた、しかもかたよった作品によって日本美術を理解し、評価していたのである。そうして作られた日本美術のイメージの上にこれ以降の日米美術交流が展開していくことになる。

浅学のため、確定できなかった固有名詞が多く、また、記事内容の読み込みも十分ではない。多くの方々の御教示を賜れば幸いである。

註1 『大観自叙伝』四五ページ 横川毅一郎編 大正一五年 中央美術社

2 New York Times Index "Japan" "Art"

3 ホイッスラー「花火」(一八七七年頃)、ホーマー「命綱」(一八八四年)など。ホーマーの略歴については資料の註11に記す。

—Sale of Japanese Bronzes 1875. 12. 16

数年前から日本美術商を営むJ・Bush 蔵の日本の銅製品の競売がField, Morris, Fenner & Co で開かれ、仏像、香炉などが高値をよんだ。

—Monotaro Sato's Japanese Collection 1876. 10. 12

サトウ・モモタロウ所有の日本の漆器、陶器、銅製品、象牙製品がLeavitt's において競売されている。二二二点が出品され、来場者が多いが売買は低迷。

—Sale of Oriental Art Works 1876. 12. 8

Messrs Leavitt & Co が東洋美術品の大オークションを開催。美術商や愛好者が多く集まったが売買は低調。薩摩、加賀の陶器などが出品され、陶器よりも漆器に高値がついた。

一九世紀後半、二〇世紀初頭のアメリカにおける日本美術の評価に関する一資料

—An Oriental Museum at Clinton Hall 1877. 5. 9

中国・日本の陶・漆器などがClinton ホールで展示されている。

—American and Foreign Picture Sales 1877. 5. 13

著名なコレクターM. Oppenheim の所蔵品が競売に付される。彼の所蔵品の多くはフランス近代絵画だが、西欧の古画、彫刻、日本・中国・ドイツなどの象牙彫りも含まれている。

—Tiffany Company's Japanese Curios 1877. 6. 12

Christopher Dresser Messrs がTiffany Co のために選んだ日本美術品がClinton ホールで公開展示された。その多くは壺、漆器、彫刻の小さいもので家庭用雑貨として適している。

—Sale of Japanese Goods 1877. 6. 19

六月一二日付の記事の品物が競売に付され、一九〇二点のうち初日の一八日に三〇〇点程が売れた。

—Sale of Japanese Goods 1877. 6. 20

昨日のオークションの第二日目。陶・漆器、有田焼、薩摩焼などが売却された。

—Japanese Art 1877. 6. 24

日本人の芸術性はカンバスや彫刻などよりも生活用品の上に発揮されている。彼らは、繊細さ、自然への愛、ユーモアのセンス、原色使用の才能に恵まれている。しかし、近年の西欧化は日本の美術を退化させつつある。欧米人は、日本美術の良い点を積極的に学ぶべきである、とする論説。

—How Japanese Fans are Made 1877. 8. 14

扇の作り方についての説明。

—The Japanese Exhibition. First National Fair 1877. 10. 21

一八七七年八月二六日付けの東京からの情報で第一回内国勸業博覧会について報じている。開会式の様子、機械館、農業館の展示に触れた後、美術について述べ、油絵はまだ幼稚で、日本画、彫刻、織物などの方が伝統的で良いものが多い、日本美術が西欧化していくのは望ましくない、とする。

—Sale of Japanese Porcelains 1877. 11. 16

Messrs Leavitt & Co が日本の有田のナガミ・フクガイの委託によって、トル

コ・ペルシヤ・日本の織物、陶器、木製家具などの競売を行なった。価格はおおむね、正価の三分の一である。

—Sale of Ceramic Art Treasures 1877. 11. 16

Edward Schenck が Messrs Herman Trost & Co¹⁾ によって委託された西欧の骨董品、日本の有田、清水焼などを競売に付している。

—The Heart of Japan 1877. 12. 9

一八七七年九月二〇日、京都からの報告。京都の地理、日本人の丁寧さ、陶器、七宝、銅器などのつくり方、絹貿易の現状、神道対仏教の宗教事情などについて述べている。

—Japanese Art-Ware at Auction 1877. 12. 14

セントニアル博覧会に出品された日本美術品が日本側の同博覧会委員であったフカイ・マコトの個人的裁配により Clinton ホールで競売に付され、八〇〇点のうち二〇〇点が売却された。品質の割に廉価で取引された。

—Japanese Fans 1877. 12. 30

Chamber's Journal からの抜粋記事。日本の扇は外国人にもてはやされるようになっており、需要も増し、価格も上がったが、品質は落ちている。

—Japanese Art 1878. 5. 10

Tiffany が日本の織物を独自の芸術的な方法で展示。

—The Art Museum. Chinese and Japanese Art 1878. 6. 28

メトロポリタン美術館で開かれた Whitney Phoenix コレクションの日本工芸品についての批評。漆器、陶器、金銀細工の技巧のたくみさを評価している。

—How Japanese Bronzes are Made 1879. 2. 24

日本の工芸品の海外での評価は高まる一方であるとし、日本のロウ型鑄造の技法について説明。

—Japanese Art 1880. 11. 1

Edward Reed と Anderson の日本美術論を比較。Anderson は日本美術は江戸期に独自性を発揮し、それ以前は中国の亜流で、西洋影響を受けてからは純粹の日本美術ではなくなった、とするが、Reed もおおむねその説に依っているとする。

—1882. 7. 29

Messrs Sampson & Co が出版した The Ceramic Art of Japan は、米、英、西欧大陸で広く読まれ、日本美術品の需要増大に寄与している。

—Works of Japanese Art. The Great Demand for them Existing in America 1882. 12. 27

アメリカでの日本美術品愛好熱は世界でも例を見ない程高く、首都から地方へ、上流社会から一般人へと層が広がっており、日本美術品専門雑誌は数種類もある。そのため日本美術品のフランス製の模造がアメリカに出まわっている。日本では国立の洋画学校が廃止され、洋画が排斥されているが、日本の伝統を守る正しい方向は、西洋美術からも広く学ぶことによって開かれるのではなからうか。

—Champion of Japanese Art 1886. 10. 25

日本美術は欧米で高く評価されているが近年質が低下してきたため、他国に学ぶための欧米視察団が派遣され、現在訪米中である。メンバーは岡倉、浜尾(新)、フェノロサ。フェノロサの人物紹介が主な記事内容。

—1886. 11. 26

William Anderson 著 Pictorial Art in Japan の四巻本の最終巻に対する書評。

—1886. 11. 26

G.A. Andsley による日本の装飾美術についての本が出版された。著者は日本美術の奇想、自然の尊重を高く評価している。

—1887. 11. 14

Woolly 骨董店ではニューヨークでの生活体験を持つ日本人画家コモリ・ノリオの個展が開かれている。技術的にはやや未熟だが日本風俗を描いた日本人による絵画として注目される。

—The Tokio Museum 1888. 11. 17

日本政府は東京の上野に博物館を建て政府の所蔵品のほか、個人の寄贈、寄託品を展示し、販売のための価格表示なども許可している。同館は海外からの出品も募っており、英国はタカタ(高田)^{註1)}商会と契約し、東京の博物館に英国製品を展示することともにロンドンの Basing ホールで日本製品を展示する。フランスも既にタカタ商会と契約済。アメリカでも契約が結ばれることが望まれる。

—Japanese Art at Present 1890. 2. 23

画家ジョン・ラ・ファージは日本美術を高く評価しているが、彼の目は過去の日

本に注がれている。現在の日本の西欧化は芸術にとっては必ずしも喜ばしいことではなく、日本が、過去同様に価値の高い芸術を生むことはしばらくはないであろう。

—1892.1.19

カリフォルニアの Edward Deakin による日本美術品コレクションが近く競売される。陶器、漆器、銅器、屏風などが含まれており、質の高いコレクションである。Deakin は Messrs の横浜支店に長年勤務して作品を集めた。

—Japanese Works of Art 1892.1.27

Deakin コレクションの競売がマジソン・スクエアのアメリカン・アート・ギャラリーで開かれ二七三点が売却された。前田家蔵梨地食器、現代の陶工マクザ・コザン（真葛香山）^{註2}、ナミカワ・ソウスケ（澤川惣助）^{註3}の作品も出された。また水彩画も二、五〇八ドルで売却された。

—The Deakin Sale 1892.1.29

アメリカン・アート・ギャラリーで開かれている Deakin コレクションの競売では、多くが正価の五分の一の廉価で売却されている。最高値は一五三〇年頃の日本陶器の父と称されるゴンダヌー・シュンスイ作の壺で六一ドル。

—Better Prices Realized at the Deakin Sale than Heretofore 1892.1.30

アメリカン・アート・ギャラリーの Deakin コレクションの競売は一転して高値が続き売上が低調となった。根付、象牙彫り、薩摩・瀬戸焼が高値で売却された。

—The Buyers have the Best of it at the Deakin Sale 1892.1.31

三〇日に最終日をむかえた Deakin コレクション競売は、オークション全体で一四四〇二、五〇ドルの売上をあげた。

—Sketches from Japan 1892.10.2

著名な商人 S. Montgomery Roosevelt がカリフォルニアと日本を旅して描いた水彩画とスケッチが Knoedler & Co で展示されている。Roosevelt はアート・ステューデント・リーグで学び、確かな画技を身につけている。芸者や農夫、日本風俗を描いたものが多い。

—Japan at the World's Fair 1892.11.23

チャンバー・オブ・コモースの社主 Charles. S. Smith は現在日本に滞在して

いるが、彼の伝えるところでは、日本はシカゴ万博の準備に意欲的で、特に金細工、漆器、織物が注目される。

—Interesting Exhibition of Japanese and Chinese Carpets and Curios 1893.3.1

Fifth Avenue ギャラリーで James I. Raymond A.A. Vantine & Co の所蔵する東洋の織物、銅器、陶器などが展示されている。これらは二週間後に競売される。

—Japanese Art at Chicago 1893.4.23

シカゴ万博には、以前に例のない厳選を経た日本美術品が出品される。特に絵画は選考が厳しく、油絵はほとんど出品されない予定。専門家の意見では日本美術の真価は生活に密着した親しみやすい物に現われており、政府による審査を経た作品では日本美術を語れないという。以下、II 絵画、III 陶器、IV 織物、V 金工、VI 象牙、木彫り、VII 漆器、VIII 七宝に分けて論じている。

—Nobukina Yamataka is Here 1893.9.9

シカゴ万博委員ノブアキナ・ヤマタカ（山高信雄）^{註4}がコニシ・コウタロウ、K・S・ニイノミ（新家孝正）^{註5}と共にニューヨークに滞在中である。彼らは六月にサンフランシスコに着き、シカゴ万博に参加。ノブアキナは陶器の権威で、メトロポリタン美術館の収集品を研究するため四日間ニューヨークにとどまる。

—A Word to Foreign Artists 1893.9.26

西欧ではアメリカ人の美術鑑賞眼の低さが通説となっているが、アメリカ人でも自分の趣味と高い鑑賞力を持つ人々がいる。廉価でも高い芸術性を持つ日本美術品を買うアメリカ人もいるのである。彼らの芸術鑑賞力は今、上昇の途上にある。

—The Juni-no-Taka Bronzes 1893.12.28

フライン・アート・ソサイエティにおいてスズキ・チョウキチ（鈴木長吉）^{註6}による十二鷹像が一〇日間展示される。これらは、金、銀、青銅、合金などを素材とし、細かくリアルな細工を施された優品。

—The Sano Collection 1894.1.7

東京のサノ・カヒチの収集品でシカゴ万博に出品されたものが、この後三日間、アメリカン・アート・ギャラリーで競売される。屏風、掛物、巻物、刀の鐔、鞘、陶器、印籠などが出品される。

—Japanese and Chinese Antiques 1895.3.30

北京駐在大使を務めたドイツの Brant 男爵と First Japanese Manufacturing & Trading Company (起立工商会社) の初代社長マッソ・ギスケ(松尾儀助)^{註7}の所蔵する日本・中国・朝鮮の布、銅器、象牙彫り、刀の鞘などが四月一日から五日まで競売される。

—Bronzes and Kake-monos from Japan 1895. 4. 16

日本の帝國議會議員カトウ・タメオの収集品が Fifth Avenue アート・ギャラリーで競売される。銅器、陶器のほか歌麿、広重ほかの浮世絵も多く出品される。

—Japan has an Exhibition 1895. 4. 26

京都で内閣博覧会が開かれ、各国からの来場を求める京都市長からの手紙がニューヨーク市駐在の日本大使にとどいた。

—Wonderful Japanese Carving 1895. 12. 20

東京の著名な彫刻家、デザイナーかつ総合芸術家であるハナムラ・マサキチが、等身大で彩色を施した生き写しの木造自画像彫刻をニューヨーク市で展示中。

—Japanese Paintings and Color Prints 1896. 1. 4

ファイン・アート・ソサイエティで開かれた四〇〇点以上の作品による日本浮世絵展は、優品ぞろいである。フェノロサによる詳細なカタログもつくられており注目すべき展示となっている。

—Many Curios from Kioto and Tokio 1896. 1. 19

東京、京都で日本人の古美術商が収集した珍しい品がアメリカン・アート・ギャラリーで競売される。

—Lacquer, Prints, Rare Curios 1896. 3. 10

大阪とニューヨークに店を持つヤマナカ商会による東洋美術品の競売がアメリカン・アート・アソシエーションで行なわれる。カタログには高取、萩、織部、仁清などの陶器、蒔絵の漆器、刀の鍔、織物などのほか二〇〇点にのぼる浮世絵、インドの仏像ほかの銅製品など計九〇〇余点がおさめられている。

—Chinese and Japanese Pottery 1896. 4. 17

Ortgie's & Co. の日本の陶器、銅器、布などの競売が Fifth Avenue アート・ギャラリーで開かれる。

—New Things for Japanese Museum 1896. 8. 2

大阪の産業博物館から派遣されたアラキはアメリカの最新技術を視察中。キネトグラフ、アドレングラフなどに興味を持ち、サンプルとして日本へ持ち帰る予定。

—Japanese Ceramics 1897. 2. 6

月刊誌『国民之友』に掲載された根岸芳太郎著「日本の陶器」の解説。

—Swords of the Japanese 1897. 6. 27

日本刀は武士が非常に大切にしたいもので、武器であるだけでなく芸術品として世界の一級品であるとし、武士の刀の扱い方、刀の芸術性、アメリカ人の所蔵者について述べる。

—A Japanese Garden 1898. 5. 26

東京のコシビキ・フライ会社は、ニュージャージー州アトランティック・シティに日本庭園を開いていたが、そこで使用された樹木がアメリカン・アート・アソシエーションで明日展示される。理想的な形に樹木を刈りこむ技術は注目に値する。

—Colossal Japanese Pictures 1898. 6. 4

北斎はアメリカでも既に著名だが、彼は名古屋の寺の境内で大達磨を描いたり、米粒に二羽の雀を描いたり、百才にして描くもの全てが生動するであろうと述べたりし、多くの逸話を持つ。

—Art Topic of the Week 1898. 11. 19

マクベス・ギャラリーで日本人画家オザワ・ナンコク^{註8}の水彩画展が開かれる。彼の絵は装飾的で繊細で優美であり、主題の多くは風景の中の鳥や魚などである。

—An Oriental Architect. H. Mamizu of Tokio is Sent from Japan to Inspect Our Schools and Libraries 1898. 12. 25

アメリカの学校・図書館建築を視察するため日本政府から派遣された H・マミズ^{註9}(真水英夫)は、八月にサンフランシスコに到着後、ボストン、シカゴなどアメリカの諸都市を視察し、現在ニューヨークに滞在中。ボストン・パブリック・ライブラリー、コロンビア大学ステューデント・ライブラリーが彼の注目する建築である。

—The Drama in Japan 1899. 4. 23

英国女優 Sallie Booth が東京で新劇を見た時の印象記録。

—The Week in Art 1900. 1. 6

J.D. Millet とフェノロサによって選ばれた六二〇点の日本絵画、浮世絵がアメ

リカン・アート・ギャラリーで展示されている。主催した二人は日本の伝統的美術を評価しており、*Miller* が一八九六年に訪日し、浮世絵の伝統技術保持者に注文した作品も今回の展示に含まれている。

—The Sprague Art Collection 1900. 12. 4

世界的美術品収集家 *Sprague* のコレクションが彼の死に伴い競売される。特に注目されるのは *J・スマシマ* の手になる装飾時計。

—Sprague Sale Continued 1900. 12. 6

Sprague コレクションがアメリカン・アート・アソシエーションで競売され、五日の最高値はサノ・タカチカ作銅製の七福神で八〇〇ドル。

—Sprague Collection Sale 1900. 12. 7

Sprague コレクションの競売が昨日も続き、銀器、日本刀、鎧などが売却され、日本の風俗・風景写真を五〇〜一五〇枚一組としたもの三五組も落札された。

—Lacquer Ware at Auction 1900. 12. 8

Sprague コレクションの競売第四日目は漆器のみが出品されたが、アメリカ人は漆器をあまり評価しないため売値は低調。最高値は梨地蒔絵の棚の一三〇ドルであった。

—Sprague Collection Sale 1900. 12. 9

Sprague コレクションの競売が続けられているが、価格は *Sprague* が入手した時の額に及ばない。昨日の最高値は *J・スマシマ* 作の装飾時計について一一五〇ドル。*シバタ・ジユ* セイ作の金蒔絵の棚は四五〇ドルという廉価で落札された。

—An Important Catalogue of Japanese Pottery 1901. 1. 12

ボストン美術館の発表によると、リヴァーサイド・プレスから、同館のエドワード・モース陶器コレクションの目録が出る予定。同コレクションは西欧における他の日本陶器コレクションに匹敵する質と量をめざし、各時代、各窯を広範に網羅しようとしている。目録には五〇余地方の六〇三人の陶工による五三七四点が多くの写真とともに掲載される。

—Artist Artisanhip Needed 1902. 5. 11

読者による投書。美術を志すアメリカ人の多くは西欧に留学するが、自国の文化をじっくり学んだ方が多い。日本美術がその良い例である。とする。

一九世紀後半、二〇世紀初頭のアメリカにおける日本美術の評価に関する一資料

—Japanese Water Colors 1902. 12. 10

日本の美術家、鑑賞者の西欧化は今やとどめることができない。日本人画家の間でパリ留学が流行しているが、アメリカン・アート・アソシエーションで西欧留学帰りの日本人画家たちの水彩画展が開かれている。ヨシダ・ヒロシ(吉田博)らの作品が展示されているが、高値で売れているのは同時に個展の開かれているアメリカ画家ウィンスロー・ホーマーの作品¹¹の方である。

—The Hunter Oriental Objects 1903. 2. 21

Frederick W. Hunter による日本・中国の陶器、漆器、金銀銅細工、印籠、根付などの収集品が競売される。

—Curios from Seat of War 1904. 1. 28

ヤマナカ(山中)商会¹²により日本の古社寺の扉、欄間などの建築付属物が競売される。

—Sale for Japan War Fund 1904. 1. 29

ヤマナカ商会による日本美術品の競売が、Fifth Avenue ギャラリーで開かれている。ヤマナカ商会は政府の依頼を受けて対ロシア戦の軍資金を作るためこのオークションを開いていると考えられる。

—Yamanaka Collection Sale 1904. 1. 30

ヤマナカ商会による競売第二日目の売上は一一〇八七ドル。会場には日本の軍資金に少しでも寄与しようとする貧しい日本人も多数見られた。

—Yamanaka Collection Sale 1904. 1. 31

Fifth Avenue ギャラリーのヤマナカ商会による競売は六〇〇点を売却し三五八二六、五ドルの収益をあげて終了。

Art Experts from Japan 1904. 3. 7

東京の日本美術院創始者で日本美術の世界的権威者である *K・オカクラ* (岡倉覚三) と風景画家 *T・ヨケヤマ* (横山大観)、*S・キンダ* (菱田春草) と漆工家 *シスイ・ロッカク* (六角紫水) がニューヨークを訪れている。*T・ヨケヤマ* は万国博に出品する風景画を持って来ている。

Japanese Methods Applied by an American Artist 1904. 4. 10

日露戦争により再燃した日本熱のため、日本美術の影響を受けたアメリカ人女流

画家 Theodosia Hawley の個展は大成をおさめている。彼女は、エト・ゲンジロウ^{註13}という日本人画家と知り合い、日本美術に学ぶところが大きかった。

—Japan's Art Revivalists 1904. 4. 29

センチュリー・クラブ・ギャラリーでオクラ・カクゾウの率いる日本美術院の会員ヨコヤマ・タイカンとヒンダ・シュンソウの展覧会が開かれている。絵は絹に描かれているが掛幅装ではなく木の額装になっており、表装は好ましくなく。“The Cuckoo” “Spring Shower” などの風景は、情感を強調し、必要最少限のものしか描かず、日本の過去の巨匠たちの流れに回帰した作品である。“Crossing the Ford on Buffalo back” などの Genre (風俗画) と呼ぶべき作品もあるが、これらは風景画におよばない。既に五分の一は買い手がついた。西洋人むけに計算された日本美術品が洪水の如く流入して来る昨今、日本の古典復古絵画の初めての展示として注目される。

—\$14,511 for Old Porcelain 1905. 4. 9

中国の古い陶器を扱った競売がフジタによってアメリカン・アート・ギャラリーで開かれており、三日目の売上は一四五一ドルで、これまでの総売上高は二二二六三、五ドルとなった。

—\$23,760 from Matsuki Sale 1906. 2. 11

昨日、マツキ・コレクションの競売で C.L. Freer が中国宮廷図を二四〇〇ドルで落札。この作品は一六七二年に描かれ、雲南総督から皇太子に贈られたもので二枚の黒漆のパネルから成り、春の朝の祭の景が描かれている。競売の総売上高は二二七六〇ドルとなった。

—By Japanese Artists, Paintings and Water Colors at the American Art Galleries. 1906. 4. 11

マツキ・ブンキョ所蔵の日本人画家による作品七〇点が、アメリカン・アート・アリシエーションで競売される。K・ミツタニ(満谷国四郎)の『寡婦』などの油絵は、技術も高くなき、訴えかけてくるものも乏しい。H・ヨシダ(吉田博) M・コスギ(小杉未醒)の作品には面白さがあるが、一七点を数える油絵は一体に西洋化されており、日本絵画という印象から遠い。R・キムラ(木村立嶽)、K・ミヤデ(三宅克己)、吉田、小杉らの水彩画の方が日本絵画としての魅力を持っている。

—Magnificent Building which Japanese Art and Handicraft have Furnished 1908. 2. 16
二月一日付のパリからの報告。一月三一日に開館したパリの日本大使館は新古の日本美術品で内部を装飾してあり、注目されている。

—Rug 200 Years Old in Oriental Exhibit 1908. 3. 17

一九〇二日、日本の陶器、象牙彫りなどがヤマナカ商会によって競売される。

—Japanese Art in Albums 1908. 6. 30

二〇八点の浮世絵画冊からなる Colonna コレクションの展示が Lenox Library で行なわれている。春信、政信、歌麿、北斎などの作品が含まれている。

—Harper's Prints to be Sold 1909. 3. 19

三月一八日のロンドンからの報告によると、ニューヨーク市在住の John. S. Harper 収集の浮世絵が来月末ロンドンで競売される。このコレクションは世界有数で、富士山連作の完全な一組がヨーロッパ市場に出るのは初めて。

—Growing Popularity in the Color Print and Renewed Demand for Etchings of the 18th Century 1909. 4. 11

西洋の一八世紀のエッチングと、日本の浮世絵に対する関心が高まっている。高踏的でない芸術が評価されるのは良い傾向。日本美術は周囲との調和を重んずるが、浮世絵を室内に飾ることによって、西洋にも日本の美術理念が広まっていことが望まれる。

—\$7,260 for Japanese Prints 1909. 4. 27

四月二六日付のロンドンからの報告によると、J.S. Harper の浮世絵コレクションが競売され、北斎の富士四十六景の完全な一組が初めて市場に出、三二一ポンドで落札された。

—Harper Sale Continues 1909. 4. 29

四月二八日付のロンドンからの報告では、浮世絵の Harper コレクションの競売が続けられ、三日目までの総売上は二二〇〇〇ドルとなった。

—American's Gift to Japan 1909. 10. 25

一〇月二四日付のボストンからの報告によると、Quincy. A. Show による日本美術品のコレクションが、氏の死に伴い、日米の交友のために日本の帝室博物館に贈られることとなった。コレクションには金蔴絵の箱一五点、印籠六九点、漆の箱

五五点他一五〇一八世紀の品が含まれる。

—Notable Collection of Oriental Art 1910.2.21

マッキ・ブンキ^{マッキ・ブンキ}による日中の絵画、屏風、版画、陶器などが Anderson オークション・ルームで競売される。呼び物は著名な画家たちによる画冊。浮世絵の作品、李唐、李龍眠、永徳、宗達、光琳の作品が含まれ東洋美術の優品ぞろい。日中の特色を比べると、中国は精神修養を第一としているが、日本美術はユーモラスで、略筆を重視している。

—Japanese Art in the Forthcoming Great Exhibition 1910.4.17

四月九日付のロンドンからの報告によると、Shepherd's Bushで開かれる日英博覧会には日本の美術品だけでなく天皇の日常生活を示す品が出品される。この博覧会により欧米で日本趣味が再燃するという見方が強い。

註1 高田商会 高田慎蔵により創立された貿易会社。高田慎蔵は嘉永五年二月佐渡に生まれ慶応元年佐渡奉行所に出仕。佐渡県外務調査役兼通訳を経て明治三年に上京、英人ペーの商店に入り、同一三年独立。同二年欧州へ商況視察に赴き、帰国後高田商会をおこして直輸入機械販売によって発展。日清・日露戦争では多くの軍需品を納付している。大正一〇年二月二十六日歿。(新撰大人名辞典、平凡社 昭和十三年)

2 真葛焼の陶工、宮川香山を指すと考えられる。宮川香山は、真葛焼の開祖長造を父に天保一三年京都に生まれ万延元年家名を継いだ。明治のはじめに横浜太田の不二山下に開窯。窯名は真葛焼で、むしろ海外で著名であった。明治二九年帝室技芸員となり、大正五年五月二〇日歿。明治一五年頃までは土焼が主で、のちに磁製の新技法で活躍したとされる。(前掲書)

3 溝川惣助 弘化四年下総旭町に生まれ、幼くして上京。陶器商を経て七宝業に転じた。ワグネルがアーレンス商会から引き受けた七宝製造工場を、明治一〇年名古屋の七宝会社が引受けたが、溝川は同工場の管理に当たり、同一七年に社主となった。図案は渡辺省亭、技術は塚本貝助らが担当し無線七宝によって絵画そのままの作品を制作。京都の並川靖之による有線七宝と対称され、同二六年のシカゴ万博頭に絶頂に達した。同二九年帝室技芸員となり、同四三年二月九日歿。(前掲書)

4 山高信離を指すと考えられる。信離は天保一三年に生まれ、石見守と称した旧幕臣。明治五年大蔵省に出仕し、以来三〇年博物館業務に従事し、累進して博物館長となった。また、棒椿山に学んで南画を描き、紫山と号す。同四〇年三月一六日歿。(前掲書)

5 新家孝正を指すと考えられる。新家は安政四年六月江戸小石川に生まれ、明治一五年工部大学校造家学科を卒業、工部省技師兼皇居御造営事務局出仕となる。同二六年シカゴ万博視察のため渡米、同四二年日本大博覧会建築事務取扱者として英米伊等を視察。

一九世紀後半、二〇世紀初頭のアメリカにおける日本美術の評価に関する一資料

学習院、奉獻美術館、日本美術協会会館などの設計、工事を手がけた。大正一一年一月二四日歿。(前掲書)

6 鈴木長吉 号嘉吉。嘉永元年八月一五日武蔵国に生まれ、岡野東龍齋に学んで鍔金家となる。フィラデルフィア万博優等賞、パリ万博金牌、ニュルンベルグ万国金工博金牌、第三回内国勲業博妙技賞、シカゴ万博記念賞牌、パリ万博名誉大賞などを受賞。帝室技芸員、美術協会特別会員をつとめる。(日本美術年鑑 画報社 大正二年)

7 松尾儀助 東京の工芸奨励家。慶応三年パリ万博で客死した佐賀、鳥岸本舖第七代の野中元右衛門の番頭で、嬉野茶をアメリカへ輸出。明治六年にはウィーン万博に随行。同七年起立工商会社をおこす。晩年は不遇で、明治末に歿。(新撰大人名辞典、前掲)

8 オザワ・ナンコクという画家は日本美術年鑑(前掲)、東京芸術大学卒業生名簿などにも見出せない。あるいは、第一回内国絵画共進会に「牡丹二鶏」「蝦蟇仙人」を出品した徳島県の画家小澤南雄記(号魚興)であろうか。(『明治美術基礎資料集』東京国立文化財研究所 昭和五〇年 三九四ページ、「農商務商版第一回内国絵画共進会出品目録」中の一二ページ)

9 真水英夫を指すと考えられる。真水は明治元年七月九日東京に生まれ、同二五年東京帝国大学工科大学建築家を卒業。コンドル、辰野金吾に師事。黙堂と号し、旧京都帝国大学、帝国図書館(東京)、在北京帝国公使館などを手がけた。(日本美術年鑑 前掲)

10 吉田博(明治九〇昭和二五) 洋画、水彩画、木版画を手がけたこの画家については、既によく知られている。なお、渡米は明治二七〜二九年、大正一一〜一四年の二回。『生誕百年記念 吉田博版画展』カタログ リッカー美術館 昭和五一年)

11 Winslow Homer (1836—1910) ポストンに生まれ、Harper's Weeklyの挿絵画家をつとめ南北戦争にも従軍。後、絵を本業とし、すぐれた風俗画、肖像画を描いた。また、水彩画をよくし、その鑑賞画としての地位の獲得に貢献している。(A History of American Art Daniel Mendelowitz 1960 Holt, Rinehart and Winston, INC)

12 山中吉郎兵衛の営む古美術商。吉郎兵衛は弘化二年大阪北区天満に生まれ、早くから家業に従事し、のち北浜三丁目に簞簞堂を開いて古美術を売買する傍ら美術工芸品の意匠に手を染め、書画の鑑定に長じて斯界の重鎮と称された。明治二七年仲間と山中商会を創立し中国、欧米に支店を持って美術工芸品の輸出入を行なった。大正六年二月歿。(新撰大人名辞典 前掲)また『日本洋画商史』(美術出版社 昭和六〇年 一九五ページ)によれば、吉郎兵衛は住友友純の発案により明治三五年につくられた関西の古美術愛好会「十八会」の世話役で、同会には藤田伝三郎(蘆庵) 藤田組創始者、嘉納治兵衛(鶴堂 白鶴醸造元)、村山龍平(香雪 朝日新聞創始者)などが参加していた。

13 記事では Yeto となっており、あるいは日本編術年鑑(前掲)に見える伊藤源次郎かと考えられる。伊藤は文久二年三月七日周防国に生まれ、森琴石に学んで南画を描いた。